夏色DAYS

玲夢音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夏色ＤＡＹＳ

【Ｎコード】
Ｎ６９９０Ｅ

【作者名】
玲夢音

【あらすじ】
「それでもやっぱり、キミが好き。」中学生の淡い恋を描いた、夏が舞台の物語。

第一章　初恋

――――夏休み。

なのに私は、真夏の空の下を歩き、学校へ向かう。

宿題、プール、映画、夏祭り・・・・・・

予定はいっぱいあるけれど、私にはもっと大事なものがあった。

「おはよー」

軽く挨拶をして、教室に入る。

「おはよ、明波（あきは）」

「ごめんごめん、遅くなっちゃった」

「ううん、大丈夫。・・・・・・じゃあ、始めようか」

今、私たち雑用委員の６人は、虹ノ樹（にじのき）中学校１年１組の教室にいる。

正式名は総務委員なんだけど、仕事が何かと雑用ばかりなので、雑用委員と呼ばれている。

今日の集まりも、文化祭の予算を立てるとかで会計をしなくちゃいけない。この学校には会計委員や美化委員というものが存在しないために、私たちの仕事量は半端なく多いのだ。

「あーあ、やっぱ雑用委員なんかなるんじゃなかった～」

思わず声に出してしまい、自分で驚く。隣にいた小山菜月（こやまなつき）が、ぷっと吹き出した。

「そんなこと言ってるけど、ほんとは幸せなんでしょ。だって・・・・・」

「あぁぁぁぁぁぁ！」

慌てて菜月の口をふさぐ。本当のことがみんなに知られでもしたら・・・・・。
「どうした？」
向かいの席で黙々と作業をしていた桜井真琴（さくらい まこと）が顔を上げる。メガネのレンズがきらりと光って、何だか怖い。
「な、何でもないよ～」
「どーでもいいけどさ、ちゃんと作業してくれよ。早く帰りたいし」
「ご、ごめーんっ」
菜月の視線を感じながら、私も作業に取り掛かった。

ガラガラッ。
ドアの開く音がし、大きな木の板を持ってきたのは日向灯（ひなたあかり）と堂本太（どうもと た）一（いち）だった。
「持ってきたぞー！　文化祭の看板」
「えー、それも俺らの仕事？」
桜井が面倒臭そうに呟く。真面目に作業しているけど、本当はみんなと同じくらい嫌みたい。
「しゃーねーだろ、雑用委員なんだから。あ、これ絵描かなきゃいけねえんだっけ。・・・・・日向、お前絵得意？」
「あ、絵なら明波が得意だよ！」
すかさず菜月が口を挟む。・・・・・って、菜月ったら何を？！
「そうそう、明波ってすっごく絵上手いの！」
何故か灯も、話に乗っている。
「じゃ、看板作りは2人にやってもらお♪　灯こっち来て一緒にやろーよ！」
嘘、嘘でしょ・・・・・。
「川添（かわぞえ）、構わねぇか？」
「え？　あ、うん・・・・・」
顔が火照っているのが自分でも分かった。ニヤニヤと笑っている菜

月たちをキッと睨む。
でも、ちょっとだけ感謝してる。だって・・・・・・

堂本君と初めて会ったのは、入学式の日。式の後、春休みに引っ越した菜月の新しい家へお邪魔した時だった。
「さ、入って入って！」
建って間もないマンションはすべてが新品って感じで、築十数年の自分の家とは比べ物にならない。
菜月とは小学校も一緒で、昔から仲が良かったからよく遊んだ。世話焼きの菜月は私を自分の部屋に案内し、すぐに紅茶とクッキーを持ってきてくれた。
「なんか気ぃ遣わせちゃってごめんね」
「全然っ！　こっちこそ忙しいのに来てくれてありがとう」

♪ピーンポーン♪
「菜月～、ちょっと出てくれる？」
台所から、菜月のお母さんの声が聞こえる。「ごめんね」と席を立ち、菜月は部屋を出ていった。
「たいち！！　どうしたの？？」
玄関から菜月の驚く声。あまりに大きすぎて、こっちがびっくりしてしまう。
それにしても「たいち」って・・・・・・誰？
「ちょ、今友達が来てるの！！」
もしかして・・・・・彼氏？
「今はムリ。帰って！！」
彼氏に対して、何というひどい言動・・・・・こんなの、普通の彼氏なら即別れてる！！
「だーかーら、さっさと帰ってって言ってんでしょ！！」
ダメだっ、これじゃ菜月のためにも良くない！

私は勢いよく部屋を飛び出した。でも、これが「超」がつくほどの大恥をかくことになるわけで・・・・・。
「菜月、もうやめな！」
「明波・・・・・。ごめんね、コイツにはすぐ帰ってもらうから！！」
「いいよ、彼氏でしょ。私妬かないから、入ってもらって。」
「え？」
「てかさー、何で彼氏いるって教えてくれなかったの？　やるじゃん、菜月ィ」
「ちょ、ちょっと待って。明波、何か勘違いしてない？」
「へ？？」
「コイツ、あたしのいとこ」
「俺、堂本太一。よろしくなっ！」
嘘ォ・・・・・。
「嘘ぉぉぉぉ！？」
恥ずかしさのあまり、その場に立ち尽くすしかなかった。私ったら勝手に彼氏って決め付けたりして・・・・・。

再び菜月の部屋。紅茶のカップが1つ追加されている。
「ぷっはははははははは！！」
「何もそんなに笑うことないじゃん・・・・・」
「そうだよ菜月、あんまり笑ったら可哀想だろ」
なんていいながら、堂本君も思いっきり笑っている。菜月に笑われるならまだしも、初めて会った、しかも男の子に笑われるなんて恥ずかしすぎる。

堂本太一。虹ノ樹中学校1年3組。菜月と同じマンション、しかも隣に住んでいる。
菜月のお母さんの妹の息子。つまり菜月のいとこだ。
「だ、だって、あたしと太一が・・・・・カップル？　マジありえ

ない！！」
「そ、それってどーゆー意味だよ？」
「あんたに彼女なんか出来っこないって言ってるの！」
「お前・・・・・言ったな！！」
2人の諍いに、私も思わず笑ってしまう。
『いとこ』なんていう都合のいい名前を使いながらも、傍から見れば本当に恋人みたいだ。
それに堂本君って、何だかカッコイイかも・・・・・

「明波！　明波ったら！」
菜月に耳元で怒鳴られ、ハッと我に返る。
「あ、ごめん・・・・・ぼーっとしてた」
「どうしたのよ、太一の方ずーっと見て。あっもしかして、太一に惚れた？」
「「違うよ！！」」
顔が真っ赤になり、とっさに否定する。・・・・・と、声が重なった。あの、堂本君と。
「え？」
思わず声がもれてしまう。
「いやっ、こんな俺に惚れるはずないよなーって」
「だよねー、こんな男に誰が惚れるかっつーの！」
「菜月に言われるとムカつくんだよ！！」
こうやって言い合いしている2人だって、すごく羨ましい。
惚れるはず・・・・・あるよ。
だって、私・・・・・

一目惚れしちゃったもん。

12年と9ヶ月間生きてて、初めてのこと。

――――これが私の、『初恋』だった。

第二章　「好き」という気持ち

「へぇ、なかなか上手いじゃん」
私の書いたイラストを覗き込んで、堂本君が言った。
「そ、そんなことないよ」
火照る顔を必死に隠そうとしたけど、バレちゃった・・・・かな。
「もしかして・・・・疲れたか？」
「え？」
「何か・・・・顔赤いし。」
「あ、ううん。暑いだけ」
「だよなぁ、クーラーの1台くらい付けて欲しいよな」
良かった・・・・何とかごまかせたみたい。
「川添、この辺も何か描いてくれる？」
「あ、うん」
こういう何気無い会話が嬉しい。

堂本君は、本当によく話しかけてくれる。恥ずかしくて目を合わすことさえ出来ない私に、自然と接してくれる。
本当は、誰に対してもそうなんだ。堂本君はみんなに優しいから。
でも、そうは思いたくない。気づいてるけど・・・・認めたくないんだ。
認めちゃったら、堂本君が私の前からいなくなってしまいそうだったから。

「「終わったーぁ！！」」
看板係の私たち、そして書類係の菜月たちが声を上げたのが、ほぼ同時だった。
「あーでも、明日もあるんだぁ」

「いい加減雑用委員だけに任せんのやめてほしいよな」
そか、明日もあるんだ・・・・。
でも、堂本君に会えるんだから、悪くないかも。
「ねえねえ、これからみんなでお昼ご飯食べに行かない??」
菜月の提案で、時計に目をやる。時間はとっくに正午を回っていた。
「そうだな、もう12時過ぎてるし。場所は・・・・・」
「「やっぱ『まくら屋』でしょ!」」

『まくら屋』っていうのは、私たち虹ノ樹中の生徒たちに人気のお店だ。
名前が名前だけに、本当に『枕』を買いに来た人も何人かいるらしいが、ごく普通の飲食店。
一見喫茶店のようにも見えるけど、喫茶店よりもメニューが豊富で値段もお手頃。
幸か不幸か学校から少し離れたところにあるので、今のところ道草が先生たちにバレたという情報はない。

「こんにちはぁ〜」
「お、いらっしゃい」
いつもならたくさんの生徒たちで賑わっている時間帯だけど、さすがに夏休みはお客さんが少ないみたいで、今日も私たちのほかには誰もいなかった。
「マスター、もしかして、俺たち本日1組目?」
「・・・・まあな」
マスターこと桝田昴(ますだすばる)。『マスター』の愛称は、名字の『ますだ』と店の主人という意味の英語『ｍａｓｔｅｒ』をかけているらしいけど、一体誰が考えたんだろう?
昴って何だかかっこいい名前だけれど、正体は49歳バツイチの親

父。マスターは「内緒だぞ」って言ってるけど、学校では有名な話だ。

「夏休みになると、虹中の生徒はほとんど来ないからな・・・・」
「そうそう、俺たちのおかげで儲かってんだし。な？」
「悔しいけど、そういうことになるな。それより、ご注文は？」
「あたしクリームソーダ！」「あ、あたしも」「俺コーラ」
「えっと、菜月と日向がクリームソーダで、真琴がコーラな。・・・・川添は？」
「えっ、私？」
堂本君に話しかけられるたび、ドキッとする。
鼓動が速くなるのが自分でも分かる。
「ああ、何にする？」
「・・・・じゃあ、私もクリームソーダにしようかな。」
「ＯＫ。マスター、クリームソーダ３つとコーラ２つ！」
「了解！」

「美味し～！！　さすがマスター！」
菜月が追加注文したオムライスを頬張る。
「いやぁ、照れるなぁ」
「マスター気持ち悪ぃ」
桜井が、メガネの奥で引いてるのが分かる。
「そうだよ、しかも菜月に惚れるなんてどんな趣味してんだよ」
「ちょっと太一、どーゆう意味？！」
「まあまあ。あ、菜月ちゃんおかわりいる？」
「いいのぉ！？　マスター太っ腹！！」
「よーし、今日はサービスだ！　みんな、いっぱい食っていいぞ！」
「マジかよ～、赤字なのにいいの？！」
「そんなことは気にすんな。ほら食え」

あーだこーだ言ってるけど、本当はみんなマスターが大好きなんだ。
そして、マスターも、そんな虹中の生徒たちが大好き。
この『まくら屋』は、マスターにとっても私たちにとっても、かけがえのない場所。

ここで彼に一言。一言だけでいい。

「好き」

って言えたら、どんなに幸せだろう。

この気持ちを彼に伝えられたら、どんなに幸せだろう。

堂本君。

・・・・・・・大好きです。

第三章　“恋”って何？

――帰り道。
何となく並んで歩く5人の影が、私たちの前を歩く。
「あー美味しかった♪」
「お前食いすぎなんだよ」
「何よ！・・・・って、桜井が突っ込むのって何か珍しー」
「悪ぃかよ」
「別に悪くないけどさ、太一に洗脳されたんじゃないの？」
「そんなんじゃねーし」「洗脳って、どーゆー意味だよ！？」
桜井と堂本君の声が重なる。菜月が可笑しそうに笑った。

菜月は本当に男子と仲がいい。堂本君はいとこだからかもしれないけど、桜井みたいなほかの男子とまで、かなり親しくしている。これといって恋愛感情は感じられないから、ただ単に『友達』ってだけなのだと思う。
それでもやっぱり、そんな菜月が羨ましかった。

昔から、男子と付き合うのは苦手だった。
小学生のときから、男子としゃべる機会はほとんどなかった。隣に座っていても、遠足のグループが同じでも、必要最低限のことしか話さなかった。
そんな自分が嫌だと思ったことは、正直一度もなかった。たぶんそれは、周りにいる女子たちも同じだったからだと思う。
――そう、菜月を除いて。
中学生になり、菜月と同じ雑用委員になってからは、男子と話す機会も増えた。と言っても、よく話すのは桜井と堂本君くらいだけど。
それでも、私にとっては大きな変化なのだと思う。

「明波ー、ねえ、明波？」
「・・・・・・え？」
「どうしたの？　ぼーっとして。あっもしかして、太一のこと考えてたの？」
「ちっ違うよ」
「隠さなくてもいいよぉ。明波が太一のこと好きだって、もう知ってるんだから。」
菜月には何でもバレてしまう。『好きなんでしょ？　ねぇ』なんて問い詰められて、仕方なく白状しただけだ。誰にも言わないでよって言ったのに、次の日には同じ雑用委員の灯に漏らしていた。それから2人は、自称『恋のキューピッド』。
「また誰かにバラしてないでしょうね」
「んなわけないじゃん。灯で最後だよっ」
「・・・・・ならいいけど」
「でもさー、何であんなやつに惚れるわけ？　あいつ良いとこなんか一つもないじゃん。」
良いところ・・・・・堂本君の良いところ？　そんなこと、考えたこともなかった。ただ、好きってだけ。『かっこいい』って思ってから、それからずっと好き。

何で私は・・・・・堂本君を好きになったんだろう。

「ハハハッ」
「何言ってんだよ」
数メートル前を歩く、堂本君の楽しそうな声が聞こえる。
「へぇ、さっきは言い合ってたくせに、仲良くやってるじゃん」
言い合いのきっかけを作ったのはあんたじゃないの。
「男って、単純だよねー。悩みないって顔してんじゃん。羨ましいな」

菜月の蹴った石ころが、電柱に当たって跳ね返った。
「ねえ、思い切ってコクれば？」
「は？　本気で言ってんの」
冗談言ってどうすんのよ、と言いながら、携帯のストラップをくるくると回す菜月。菜月の携帯は、マスコットやら何やらがいっぱいついていて、一目見ただけではそれと分からない。

『コクれば？』菜月は簡単にそう言うけれど、今の私にそんな勇気はない。
「なっ菜月は、好きな人いないの？」
「いるわけないじゃん。うちの学校、イイ男いないもーん」
「ふーん・・・・・」
会話が途切れる。おしゃべり好きの菜月といて、会話が途切れることは滅多にないのだけれど。
「明波、変わったね」
突然、菜月に言われて驚く。私が・・・・変わった？
「太一のこと好きになってから。何か、変わった」
「どんな風に？」
「何ていうか・・・・・うまく言えないけど、とにかく変わった」
「何それ」
「でも、いいことだと思うよ。恋すると、人は変われるって言うし」
“恋”という実感が、未だにない。堂本君が好きということは自分でもよく分かっているけれど、それが恋なのかどうなのか、よく分からない。
ドラマや映画でみる“恋”とは、ちょっぴり違うように感じるのだ。
———恋って、何なのかな。
これをほんとに、恋って言っていいのかな。

第四章　母の過去　私の未来

「お帰り。遅かったじゃない」
リビングに入る私に気づいた母が、雑誌から顔を上げた。
「うん、総務の子とお昼ご飯食べてきた」
そう、と言ったきり、母はまた雑誌に目を戻す。私が中学校へ入学してから、母は少し変わってしまった。時給８５０円の喫茶店のパートをやめ、毎日リビングでダラダラしている。第二の人生を歩む、なんてかっこいいこと言ってるけど、のんびりしたいだけじゃないの。
『明波ももう中学生でしょ。子育てが一段落ついたから、ちょっとぐらいゆっくり過ごしたいのよ』
これが母の口癖だった。子育てって、そんなに大変なんだ。何だかこっちまで気の毒になってくる。

「明波」
麦茶を一気飲みした直後、ふと思い出したようにこちらを振り向いた。
「え？」
「好きな人、いないの？」
「え？！」
ちょ、ちょっと反則じゃない？　いきなり何、そのストレートな質問。
当たり前だけど、堂本君が好きだということは、家族には内緒だ。バレでもしたら、どんなに冷やかされるか。いや、母なら『堂本君に会いに行く』なんて言いかねない。
「いっいるわけないじゃん。だいたい、うちの学校にいい男子全然いないもん」

とっさに言い訳。菜月が言ったことそのまんまだ。
「そう・・・・・。いやなんかね、中学生になったら彼氏とか出来るんじゃないかって思っただけよ。あ、いないならいいのよ、別に」
「いなくて悪かったわね。てかお母さん、中1のときに彼氏いたの？」
母の顔が真っ赤になる。感情がすぐ表に出るのは、やっぱ母親譲りだ。
「うーん、彼氏ってわけじゃないけど、好きな男の子はいたわよ。同じ環境委員でね、一番仲の良い男の子だった。気がつけばそばにいる、そういう子だったかな。知らず知らずのうちに好きになってて・・・・・」
いつの間にか私は、母の昔話に聞き入っていた。
「告白は、したの？」
「出来るわけないじゃない。それにその子、友達のいとこだったのよ。何だか言いづらくって」
「嘘！？」
思わず声を出していた。母の驚いた表情で、ハッと我に返る。
「ほんとよ。でも、どうしたの？　そんなに驚いて」
「あっいや、別に何でもない。・・・・・それで？」
「それっきりよ。普通に卒業して、それから1回も会ってないわ」
友達のいとこを、好きになってしまった。それって、私と全く同じじゃん・・・・・。

「あ、今の話お父さんには内緒ね」
母は雑誌を閉じると、晩御飯の仕度しなくちゃ、と席を立った。
「待って、お母さん」
「何？」
「恋って・・・・・、何なのかな」
おいおい、何聞いてんのよ私。バッカみたい。
「どうしたのよ、急に」

「・・・・・ううん、何でもないの。ごめん、変なこと聞いて」
ああ、恥ずかし。親にこんなこと聞くなんて、私どうかしてる。真っ赤になった顔を隠すために、俯き、リビングを出ようとした。が。
「その人一筋・・・・・ってことかな」
「え？」
「かっこいいなとか、一緒にいたいなとか。抱く気持ちはそれぞれだと思うけど、その人しか考えられないってことだと思う」
言い終えてから母は、『自分の娘に何教えてんのかしら』と、一人で恥ずかしそうに笑っていた。何とも言えない雰囲気に絶えられず、そそくさとその場をあとにした。

『恋とは、何か』
その問いに対する母の答えは、母としての答えではなく、一人の“ひと”としての答えだった。私のこともまた、娘ではなく一人の“ひと”として見ている答えだった。恋に関して、いや人生に関して全く無知の私にとって、目の前にある答えは理解しがたいことではあったけれど。

それにしてもお母さんと私って・・・・・すごくよく似てる。
好きになった人が友達のいとこだということも、同じ委員をやっていることも。

よく分からないけれど、私は今、“恋”をしているのだと思う。なんとなく、なんとなくだけれど、そう思った。
たぶんそれは、母の過去と、私の今がとてもよく似ているから。

母は、恋をした。
だからきっと私も、恋をする。

そんなふうに簡単に決めつけちゃいけないのは分かってる。いくら親子が似ているからといって、同じようになるとは限らない。

・・・・・でも。

母のようになりたいという、希望程度なら神様も許してくれるかな。

“母の過去　私の未来”という、ちょっとした希望くらいは・・・・・ね？

第五章　恋のライバル

「やべー、宿題終わんねえよ！！」
堂本君のこの台詞から、今日も雑用委員の仕事が始まる。
「サボってるからだめなんだよ、太一は。あたしもう全部終わったよ～」
そか。菜月は小学校のときから宿題を7月以内に終わらせると決めているらしい。すごいなー、なんて思ったけど、でも私には絶対無理だ。
「・・・・るさいなぁ、だったら手伝えよ」
「ダメに決まってんじゃん。宿題は自分でやるもんですよーだっ」
「チッ、まあ自分でやるしかねえか。・・・・・てか真琴が宿題終わってないなんて、なんか意外だな」
雑用委員の集まりにまで宿題を持ち込むってことは、そうとうヤバイらしい。みんなも口を揃えて「ほんと意外」と不思議そうにその光景を見つめていた。
「俺もいろいろ忙しいんだよな」
とキザっぽくいう桜井を“真面目”と決め付けるのは、どうやら間違いのようだ。

「仕方ないな、今日はみんなで勉強するか」
と言ったのはもちろん堂本君。
「えっ、でも今日の仕事は？　まだ文化祭のスケジュール、全然立ててないよ」
「んなもん、『出来ませんでした』って言えばいいんだよ。どうせ今日はミムちゃんもいないしさ。帰っちゃおうぜ」
ミムちゃんっていうのは雑用委員・・・じゃなくて総務委員担当の女の先生だ。本名は三村友香（みむらゆうか）で、普段は英語科担当の先生。完璧なスタイルと学歴の持ち主で、赤いメガネは男子生徒や男性教師から

好評。・・・・・らしいけど、あの赤メガネは伊達だっていう噂もある。

「あんた三村先生のこと好きなくせに、そんなことしていいの？」

・・・・・えっ？

菜月の言葉に、思わず肩がビクッとなる。

「ち、違えよ！」

「照れなくてもいいよ、太一が三村先生目的で雑用委員になったの知ってるんだから。先生悲しむと思うな。ただでさえ英語出来ないあんたが、雑用委員の仕事サボったりしたら、もう失望だね。『堂本君、ひどいわ・・・・・』なーんて」

「菜月、冗談もいい加減にしろよ！！」

冗談？　堂本君はそう言ったけど、彼の頬の赤らみを見て、素直に冗談なんて思えない。

堂本君は、三村先生のことが好きだったの？

三村先生目的で雑用委員？

嘘でしょ？　・・・・・嘘だよね？

まともに立っていられなくなった。“あんた三村先生のこと好きなくせに、そんなことしていいの？”菜月の言葉が、胸にささる。

どうしたらいいか分からなくなって、私は思わず教室を飛び出した。

「明波！！」

灯の声も聞かなかったことにして、猛スピードで走り続ける。上靴のまま校舎を飛び出したけど、そんなことどうだっていい。

みんな、・・・・・バッカみたい。

気がつくと、学校から１ｋｍ近く離れた公園に来ていた。こんなにも遠い距離を一気に走ったと思うと、自分でも驚く。

荒い呼吸を整えながら、傍のベンチに腰掛ける。小ぢんまりとして

いる上に誰もいないから、何だか寂しい。

みんな、バッカみたい。さっきまでそう思っていた自分が情けない。大体、堂本君が誰を好きになろうと、私が口出しすることじゃないんだ。いくら私が堂本君のことを好きであれ・・・・・そう。初めから、覚悟しておかなくちゃダメだったんだよ。相手の気持ちを考えないで、ただ『好き』なんて言ったって、そんなの、ダメなんだ。・・・・・分かってる。分かってるよ。

だけどやっぱり、堂本君が三村先生を好きになるなんてショックだった。

そりゃあもう中学生だし、綺麗で頭のいい先生を好きになることも不自然じゃない。

でもやっぱり・・・・・悲しいよ。悔しいよ。

こらえていた涙が、どっと溢れる。溢れ出した涙は止まらずに、次から次へと流れ落ちていく。

「あーきはっ」

後ろで声がした。振り返ると、灯が満面の笑顔で小さく手を振っている。

「もー、明波ったら走んの速すぎ。死ぬかと思っちゃったよ」

汗だくで荒い息をしたまま、灯は私の隣に腰掛けた。わざと明るく振舞おうとしているのは、私にも分かった。

「灯、無理しなくていいよ」

「え？」

「私のことは、気にしなくていいから」

「・・・・・うん」

私の最も苦手とする雰囲気、“沈黙状態”というやつが静かな公園を余計に静かにする。“静か”を通り過ぎて、“無音”って感じだ。

しばらくして、灯が口を開いた。

「明波、あたしさ」

「うん」
「堂本君、明波のことが好きだと思ってた」
そんなこと、あるわけない。でも、そうだったらどんなに幸せだろう。
「だから、今までずっと黙ってたんだけど」
灯はそこで言葉を切り、すぐに続けた。
「あたし、堂本君が好き」
・・・・・えっ？
「嘘・・・・・」
菜月なら、『なーんてね』ってごまかすかもしれない。でも、灯はそうはいかない。
・・・・・本気だ、灯は。
話が急展開すぎて、信じられないけれど。
「正直ね、明波と堂本君が両想いなら、しょうがないって思ってた。でもそうじゃないなら、これからは」
「・・・・・これからは？」
「あたしと明波は、ライバル同士ってことで」
いつもの灯じゃなかった。いつも菜月の後ろにいるような、どっちかっていうと大人しめの、いつもの日向灯ではなかった。
「あたし、負けないから」

負けないから、まけないから、マケナイカラ・・・・・
それって・・・・・
“恋の勝負”ってこと？

「でも、堂本君は三村先生が好きなわけだし」
私の弱々しい反論も、今の灯には通用しない。
「そんなこと、関係ないよ。私は、堂本君を振り向かせてみせる！」
――――振り向かせる。
私にも、出来るだろうか。

「・・・・・降参する気？」
堂本君が、好き。
好きだから、もっと一緒にいたいから。だから・・・・・
「負けないよ、私も」
私のその言葉を聞いた灯は、満足そうに笑った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6990e/

夏色DAYS

2010年10月10日04時57分発行